

B-61 家庭洗たくの研究—布のほつれについて—
金城学院短大 山田寿子

目的 洗たくにおける機械作用は、よごれ除去の必要条件であるが、被服の損傷を起すことがある。特に、布端や縫代が洗たく中にほつれると、布がかうまって洗たくの能率を低下し、被服を損傷して耐用年数と短かくする。各種繊維が布端の始末方法と洗い方により、どのようにほつれてくるかと実験した。

方法 供試布：綿、レーヨン、ポリエステル、ポリエステル・綿混紡、^{ナイロン}絹、羊毛（以上織物）羊毛、アクリル（以上ニット）布端の始末：(1) 裁ち目のまま、(2) 端ミシン、(3) 端伏せ縫い、(4) ミツ折り縫い、(5) ミツ折りぐけ、(6) ロックかがり、洗い方：洗たく袋使用の有無、自動洗たく機による繰り返し洗たく、自然乾燥、

結果 一般に、洗たく袋を使用すると、布のほつれは少く、収縮率が低い。布端の状態は、洗たくと繰り返しすると次第にほつれが増すが、ミツ折り縫いとミツ折りぐけは、ほつれが抑えられて布端の始末の効果が良好であつた。裁ち目が出ているものは、端ミシン、端伏せ縫いともに、ほつれが目立つた。またロックかがりは針目の荒さよりも、かがり始めと終りの部分で、糸の端が布や糸に引掛かつて引張られると、急激にほつれが増大した。最近縫製が工業化して、縫代の始末方法がスピード化の傾向にあり、縫代の浅い既製服と利用することが多くなったので、ほつれを防止する洗い方や縫製技術に注意すべきである。